

第11課「恵みによる選び」

安息日「今週のテーマ」

神が全ての人を罪の下に閉じ込められた理由は、全ての人を神が憐れみ、救うためでした。この救いの計画のためにユダヤ人が選ばれ、役割が与えられました。しかし、彼らは失敗してしまいました。罪を示し、救い主キリストを求めさせる律法を誤解、誤用してしまっただけです。そこで神は異邦人を信仰による義という本来の救いの道へと導かれました。それは、選民ユダヤ人を見捨てたのではなく、彼らにねたみを起こさせて自分たちの間違いに気付かせ、ついには神の憐れみにより、彼らも信仰による義の道によって救われていくというシナリオでした。パウロはこの神の計画、すなわち全ての人を神は罪人としつつ、全ての人を憐れんで救われることを示し、ユダヤ人も異邦人も共にキリストにあって救われることを語っています。最後にこの神の恵みの深さとご計画のすばらしさに感動して、パウロは神を讃美して章を締めくくっています。

日曜日「律法の目標」

もしクリスチャンとして熱心に努力して信仰生活を送っているながら、キリストとより親しい関係が築かれず、さらに信頼して好きになっていなければ、それはユダヤ人と同じ「自分の義」を求めていることとなります。「神の義」はキリストの品性が与えられるものであって、自分で作り出すものとはまったく違うものです。パウロが10章の2、3節で語っていることばが自分への言葉となっているか判断するためには、4節の「キリストは律法の目標」（口語訳では「終り」）を正しく理解する必要があります。キリストは律法の要求を完全に満たした方、律法を成就された方なのです。そして、キリストは律法の誤解、誤用に「終り」を告げられた方でもあります。そのキリストを信じる者に神の義が与えられるのです。（マタイ5：20を参照してください）。

月曜日「恵みによる選び」

パウロの頭の中では同胞のユダヤ人への心配があり、11章の初めに自問自答しています。質問は、「自分の義を求めていたユダヤ人は神に見捨てられてしまったのか？」です。そして、「決してそうではない」と断言しています。その理由は：（1）パウロ自身もユダヤ人だが見捨てられていないから。（2）エリヤが迫害を受け自分ひとりと思ったとき、神は7000人の残りの民を備えておられたように、忠実なユダヤ人を同じように残して下さるから。神は役割としてユダヤ人をかたくなにされたが、それも神の全ての人を救う計画のうちにあることをパウロは理解していました。キリスト教嫌い、宗教に無関心の方に対して、神から見捨てられていると思ってしまうようなことはないでしょうか。

火曜日「接ぎ木された枝」

またもやパウロは11節で自問しています。当事のローマの教会では多数派となっている異邦人クリスチャンと草分けのユダヤ人クリスチャンの関係が仲良く歩んで行けるように配慮しています。ユダヤ人の失敗が異邦人への救いの門を開きましたが、異邦人クリスチャンが高ぶりの失敗を犯さないように接ぎ木のたとえを用いて警告をしています。「あなたは信仰によって立っています。思い上がってはなりません」（20節）。わたしたちも異邦人クリスチャンとしてパウロの言葉に耳を傾けましょう。

水曜日「秘められた計画が啓示される」

「秘められた計画」とはユダヤ人を異邦人伝道の後、救いに導くという計画のことです。25、26節には難解な言葉、「異邦人全体が救いに達する」と「全イスラエルが救われる」があります。これは、異邦人とユダヤ人全員が救われることではなく、全世界の異邦人に福音が伝えられた後、ユダヤ人で神の慈しみを信じ受け入れる人たちは皆救いに預かるという意味です。神は一人でも多くの人を救いに導こうと計画され、働かれておられることを覚えたいです。

木曜日「罪人の救い」

ガイド問7の解説文中に「神は世界を創造する以前から、人類を救い、人間や民族を御自分の器として用いて御心を実現する計画を立てておられました」とあります。あまりにもスケールの大きな話ですが、わたしたちもその器の一つです。今日本という国でこのすばらしい神の慈しみと救いの恵みに預らせていただいていることはなんとすごいことでしょうか。パウロは神のすばらしさ、愛と恵みの深さに感動して、最後に讃美をささげています。35節に「だれがまず主に与えて、その報いを受けるであろうか」とあります。この讃美を自分の祈りとしていきたいです。